環境アセスメント学会誌 17 (1)：94-99 (2019)

内外動向

第12回“アジア環境アセスメント会議2018 in 静岡”開催報告

川村昂史

写真1　会場前のAIC2018の看板

1. 概要

2018年8月20日から22日までの3日間，静岡県静岡市において「第12回アジア環境アセスメント会議in静岡（AIC2018 in Shizuoka）」が“グリーン・リージョンと環境アセスメント”をテーマとして開催された。研究発表セッションは静岡県立大学にて20日及び21日の2日間で149名（内訳：日本より83名，韓国より44名，中国より15名，インドネシアより4名，タイより3名）の参加者があり，88件（口頭発表51件，ポスター発表37件）の研究発表が行われた。21日の夕方からは日本平ホテル（静岡市清水区）にて地方色を打ち出した豪華なバンケットがあった。22日は観光バスで39名が富士山周辺の湖沼，河川，滝などの自然環境を中心としたテクニカルビジットを楽しんだ。

写真3　会議初日朝一番の記念撮影

当会議は当学会常務理事で国際交流委員長の田中章氏（東京都市大学）が実行委員長，静岡県立大学の三宅祐一氏が運営委員長として開催された。

当会議開催にあたり，環境省，独立行政法人国際協力機構（JICA），地球環境戦略研究機関（IGES），国際協力銀行（JBIC），日本貿易振興機構（JETRO），静岡県，静岡市，日本環境アセスメント協会（JEAS），静岡県環境アセスメント協会（SEA），伊豆半島ジ

写真2　日本平からの重層な景観

写真4　田中充当学会会長によるウェルカムスピーチ

アジア環境アセスメント会議2018大会実行委員会事務局幹事
東京都市大学大学院環境情報学研究科

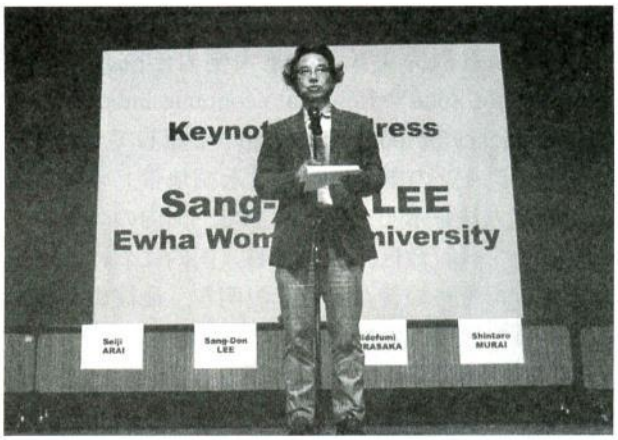

写真５　Sang-Dong Lee 韓国 KSEIA 学会会長の挨拶

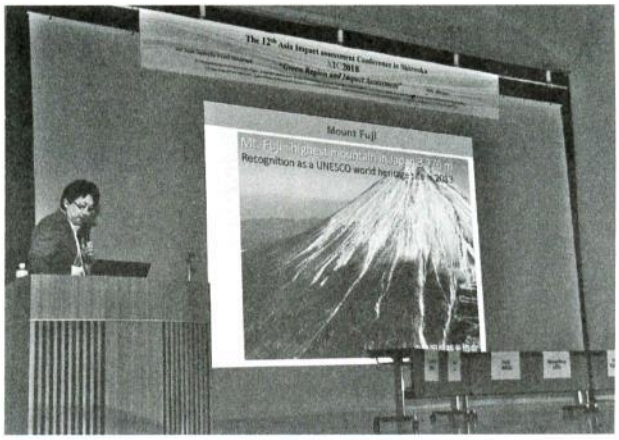

写真７　山田和芳氏による静岡の多様な自然の紹介

オパーク，静岡県立大学，東京都市大学より後援やおよび協力を受け，また，静岡市，静岡市清水区，株式会社環境アセスメントセンター，EAI 株式会社，静岡県環境アセスメント協会，株式会社緑生研究所からは様々な支援を受けた。実行委員会としてここに厚く御礼申し上げる次第である。

2. AIC 会議の背景と趣旨

AIC はアジア諸国の研究者，実務者，学生等の学術交流を目的とした国際会議である。2003 年に日本で行われた日韓二国間ワークショップが初回で，今回で 12 回目となる。この間，2011 年に中国が，2017 年にベトナムが加わるなどの経緯があり，今年 2018 年会議は広くアジア諸国間の交流を目的としようということで，名称をアジア環境アセスメント会議（Asia Impact assessment Conference, AIC）とした。

今年のテーマの「グリーン・リージョン」（Green Region）とは，流域などの一定地域の中で，人間活動の生態系に与えるプラスとマイナスの影響のバランスが取れている地域を指す。言い換えれば地域全体としての「ノーネットロス」を実現した地域のことである。今回の会場のひとつの日本平ホテルからの巴川流域→折戸湾→三保半島→駿河湾→伊豆半島→富士山という重層な景観は，グリーン・リージョンを考えるのに相応しい場所であり，また，本会議全体を通して富士山のある静岡，日本の自然資本の素晴らしさを様々な角度（生物多様性，食，伝統，文化，信仰等）から海外に向けて発信することができたと実感した。

3. オープニングプレナリー（1 日目　静岡県立大学）

午前 9 時，柴田裕希東邦大学准教授の司会で開幕。オープニングプレナリーで田中充学会長（法政大学教授），田辺信宏静岡市長（代理：美濃部雄人副市長），Sang-Don Lee 韓国環境アセスメント学会会長（韓国梨花女子大学教授），Hong-guang Cheng 北京師範大学教授，鬼頭宏静岡県立大学学長より開会挨拶を頂戴した。特別講演として静岡県の山田和芳ふじのくに地球環境史ミュージアム教授から “The nature

写真６　鬼頭宏静岡県立大学学長からの歓迎の挨拶

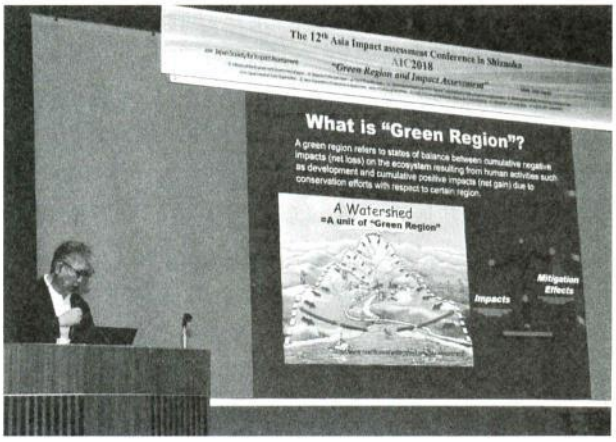

写真８　田中章氏によるテーマフォーラムの趣旨説明

写真９　テーマフォーラムのパネルディスカッション
右から Lee 女史，田中章氏，村井氏，倉阪氏，Lee 氏，新井氏，Li 氏，丹羽氏。

of Shizuoka–from Mount Fuji to Suruga Bay" と題して，富士山，南アルプス，伊豆半島，駿河湾等の静岡の重層な自然環境について紹介があった。

4. テーマフォーラム（1 日目　静岡県立大学）

田中章氏の議長でシンポジウム形式でのテーマフォーラム "Green Region and Impact Assessment" が開かれた。グリーン・リージョンを実現するための環境アセスメント制度の役割など，アジア各国での多様な取り組み状況について 7 件の報告があった。はじめに，田中章氏から "Green Region and the Role of SEA/EIAs" と題する今回のフォーラムの趣旨説明があった。

冒頭，日本で急速に活発化している太陽光発電所開発の静岡県伊豆半島における現状を紹介し，流域のような生態的単位の中で開発と保全のバランスを図る役割は環境アセスメントの今後の重要な課題とした。このようなグリーン・リージョンを支える仕組みとして，ゾーニング，ティアリング，ミティゲーションヒエラルキー，ノーアクション案を含む複数案評価，生物多様性分野の定量評価を含む環境アセスメント制度の重要性と，グリーン・リージョンを促進するためのエンジンになり得る日本版生物多様性バンキングとも言える「流域バンキング」の自治体による指定を提案した。

2 番目は村井辰太朗氏（環境省環境影響評価課係長）が "EIA system and its Implementation in Japan" と題して，日本における環境アセスメントの歴史，環境影響評価法に基づく手続きの概要の説明の後で，最近の話題として風力発電におけるゾーニングマップの整備事業，環境省が太陽光発電所建設を法アセスの対象事業にすることを検討中であることなどの紹介があった。

3 番目は倉阪秀史氏（千葉大学大学院教授）が "Sustainable Zone"–Regional economic indicators on self-sufficiency of food and energy" と題して，グリーン・リージョンの概念に近い「永続地帯」の概念とその算定方法を示した。その上で，国内のエネルギー永続地帯（行政区）数の推移，国内における再生可能エネルギーの普及状況を説明し，最後に利益優先での再生可能エネルギー普及の問題を指摘した。

4 番目は韓国環境アセスメント学会会長の Sang-Don Lee 氏（韓国梨花女子大学教授）が "Application of HEP for maximizing habitat value in the process of road construction" と題して韓国高速道路建設による Korean Waterdeer（*Hydropotes inermis*）への影響の定量評価，さらに生物多様性オフセットとしての eco-bridge（生息地の分断化とロードキルを防止する野生生物用の橋）の効果的な架橋位置の検討のために HEP（Habitat Evaluation Procedure，ハビタット評価手続き）を用いた事例を説明した。韓国では高速道路建設で既に生物多様性オフセットが義務づけられているため HEP が必要になったという経緯の紹介があった。

5 番目は新井聖司氏（日本環境アセスメント協会）が "Study on introduction of biodiversity offset in Japan" と題して，日本の環境アセスメント業界の企業グループとして HEP やハビタットヘクタール法（Habitat Hectare method）を用いた生物多様性定量評価の試行と比較，米国における生物多様性オフセット制度の比較と，日本への導入可能性の研究成果を発表した。

6 番目は Wei Li 氏（北京師範大学教授）が "Promoting green development of the resource-based cities in China by integrating the three-line model into SEA" と題して，最新の中国政府の生物多様性保全に対する理念，戦略的環境アセスメント（SEA）の動向について，生態系保全，環境の質と安全性，自然資源の利用の 3 つの観点から説明した。その際，グリーン・リージョンという生態的単位でかつ定量的に評価することの可能性を示唆し，この分野における国際協力の必要性を述べた。

7 番目は丹羽崇人氏（エックス都市研究所株式会社）が "Proposal towards the Creation of General Policy for Mainstreaming of Biodiversity in Japan" と題して，愛知県における生物多様性ポテンシャルマップの整備，工場緑地を活用した保全活動の推進を紹介した。また，日本の都道府県レベルでは最初となる愛知県版生物多様性オフセット，「あいちミティゲーショ

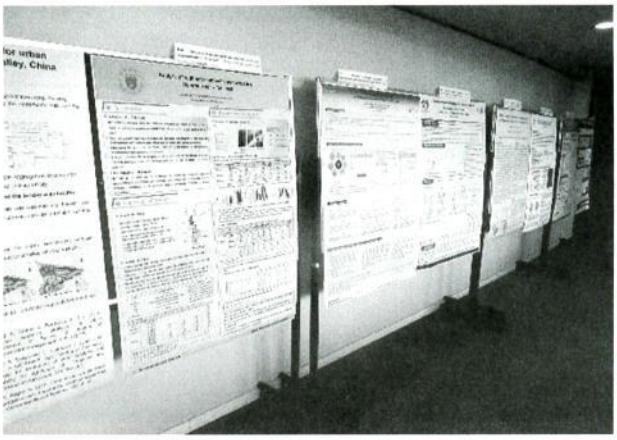

写真 10　ポスターセッションの様子

写真 12　香港 Shirley Lee 氏

ン」制度の導入の試みについて説明した。

最後に田中章実行委員長と Shirley Lee 氏（Hong Kong Institute of EIA）の Co-chair によるパネルディスカッションにより，グリーン・リージョン実現のための課題と環境アセスメント制度の関係について，会場からの質疑応答を交えながら活発な議論が行われた。

5. 口頭発表およびポスターセッション（1 日および 2 日目　静岡県立大学）

口頭発表セッションは 1 日目午後から，2 会場に分かれて行われた。この日のセッションではグリーン・リージョン，国際協力，生態系，SEA/EIA に関する発表を中心に 4 セッション，16 件の口頭発表があった。2 日目は朝から行われ，国際協力，SEA/EIA，再生可能エネルギー，公害防止を中心に 28 件の口頭発表があった。口頭発表は 2 日間で国内から 29 件，海外から 22 件の合計 51 件の発表があった。

ポスターセッションは当学会若手の会により，20 日午後と 21 日午前および午後に開催された。発表セッション会場の 2 階ホワイエとエントランス付近に，国内から 8 枚，海外から 29 枚の合計 37 枚のポスターが掲示された。

6. クロージングプレナリー（2 日目　静岡県立大学）

当学会副会長の村山武彦東京工業大学教授による司会で Jong-Gwan Jung 氏（Chungnam Institute），Shirley Lee 氏（元香港 EIA 研究所），原科幸彦当学会理事より閉会の挨拶があった。原科理事からは今年 10 月に開催予定の IAIA 特別シンポジウム（クチン，マレーシア）の案内があった。

7. バンケット（2 日目　日本平ホテル）

クロージングプレナリー後，参加者はバスで日本平ホテルに移動。ここは，有度山，旧清水市市街地，折戸湾・清水港，三保の松原，駿河湾，伊豆半島，富士山を一望する富士山眺望の名所である。ホテルに到着しホテルの前庭に出ると，奇跡的に二つの台風の合間に現われた富士山を背にした集合写真

写真 11　韓国 Jong-Gwan Jung 氏

写真 13　原科幸彦氏

写真 14　姿を見せた富士山をバックに日本平ホテルで

を撮影することができた。バンケットは夕陽に照らされ刻々と変化していく富士を望むガラス張りの部屋“富士”で開催された。

まず，最初に浴衣に身を包んだ堀亜佑美氏（東邦大学）と大畑聖一郎氏（東京都市大学）の進行によりバンケットが始まった。最初に SDG's を推進している静岡市長の田辺信宏氏による歓迎の挨拶があった。続いて静岡市清水区長の高木強氏による清水への歓迎の挨拶と乾杯があった。

バンケットには清水区より清水港で水揚げされたミナミマグロ，駿河湾産のサクラエビ，シラスを使った寿司，茶蕎麦が提供された。寿司コーナーには海外からの参加者も含めたちまち長蛇の列ができ，清水ならではの味覚に舌鼓を打っていた。会場入り口付近には静岡市および清水区の PR コーナーが設けられ，海外からの参加者に対して観光案内やお茶等の特産品が紹介されていた。

終盤，田中章実行委員長より今回の会議への後援および協賛団体の紹介と謝辞の後，長期の準備と今回の運営に対して東京都市大学，東邦大学，静岡県立大学の学生に対して感謝が述べられた。

最後に同実行委員長より，日韓中の AIC ステアリングコミティーの話し合いにより，次期大会（AIC2019）は中国の Wei Li 氏が実行委員長を務めることがアナウンスされ，来年に向けて実行委員長の引き継ぎが行われた。登壇した Wei Li 氏からは，AIC2019 は中国のハワイと言われている海南島にて開催予定であることが発表されて盛況のうちにバンケットが終了した。

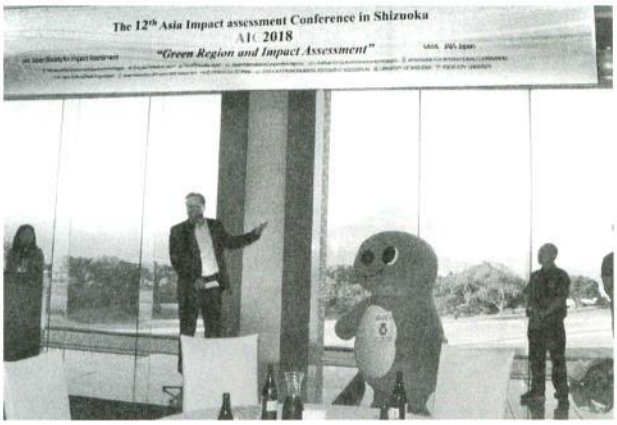

写真 16　高木強清水区長と“シズラ”による歓迎の挨拶

8. テクニカルビジット（3日目　富士山周辺）

快晴の 3 日目，静岡駅に国際色豊かな韓国，中国，インドネシア，タイ，日本からの 39 名が集結。東京都市大学の学生が作成したテクニカルビジットのしおり（英語）と清水区より提供された静岡茶を配布して静岡駅を出発した。

東名高速に入り正面に富士山が見えると，参加者からは歓声が上がった。最初の目的地である田貫湖に到着後，ウォーキング，サイクリング，温泉浴を行うグループに分かれて行動した。参加者達は湖畔から富士山を眺めたり，集合写真を撮ったりと楽しい時間を過ごした。2 番目の目的地は白糸の滝で，昼食として豪華な幕の内弁当が提供され，白糸の滝や芝川の渓流を見ながら思い思いの場所でいただいた。3 番目の目的地の久能山東照宮（日本平のある有度山）

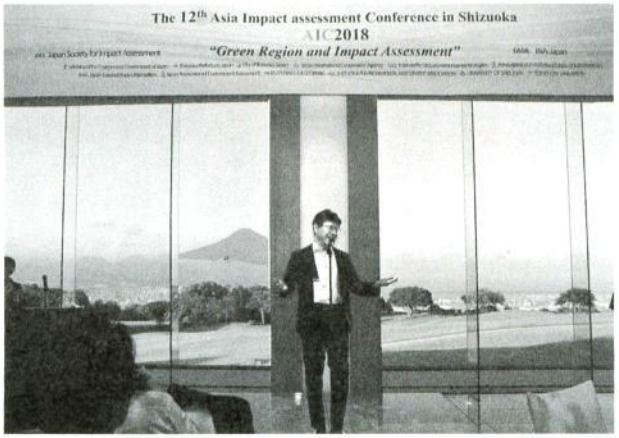

写真 15　田辺信宏静岡市長による歓迎の挨拶

写真 17　Wei Li AIC2019 実行委員長への引き継ぎ

写真 18　テクニカルビジットでの田貫湖ウォーキング

への移動中，三保の松原や清水港と富士山が見える場所を通過した際に車内から歓声が上がった。日本平に到着後，久能山東照宮へは有度山の複雑な地形や植生の上を走るロープウェイで移動した。東照宮到着後，外国人参加者には英語音声ガイドが配られ，宝物館を含む境内を散策した。その際，随行した実行委員会の大学生が参加者に日本式の神社参拝の作法やおみくじの読み方や意味を教える場面もあり，日本の伝統文化を体感してもらうことができた。

静岡駅到着後は駅前で記念撮影を行い，近くにあった静岡の地場産業であるプラモデルや玩具の博物館である静岡ホビースクエアに立ち寄った。ここでは子供たちなどへのお土産としてプラモデルを購入した参加者も多かった。最後に，参加者たちから今回の会議とその運営に対して多くの賛辞と感謝の言葉をいただき，来年の AIC2019 での再会を誓って別れを惜しんだ。

9. 所感

今回の会議はきわめて盛況でかつ参加者の皆さんにたいへん喜ばれるものとなった。実は，この時期，台風が2つ続けて東海地方を襲ったのにも拘わらず，まさに奇跡的に本会議はその2つの台風のわずかな間を縫って晴天の日に開催することができた。このような奇跡もあったが，そもそもこの会議が成功した要因は以下の3点があったからではないだろうか。

一つ目は外国人参加者を迎えるにあたり，ウェブサイトの開設や会場の設備など1年前から多方面に対して周到に準備をしてきたことである。例えば，エントランスに置いた大看板の基盤は静岡市の提供であり内容は東京都市大学でデザインした。大看板のデザインは，錦絵の富士山を大きく示した結果，その前で撮影する海外からの参加者が多く見受けられた。また，清水区からはミナミマグロの寿司など地元食材でバンケットを盛り上げていただいた。会場にはコーヒー・コーナーとプロの接客係を用意し，コーヒー，紅茶，ジュースなどだけではなく特産物である静岡茶も取り入れ，また飲み物だけではなく，マフィンやケーキを含む様々なお菓子類をたくさん用意した。このような環境を用意したことで，参加者同士の活発な議論が促進されたように思う。

二つ目は開催地の魅力（清水，静岡，富士山など）を全面に押し出したことである。地方都市開催であったにもかかわらず，149 名の参加者中 66 名（44%）もの海外参加者があったことは，富士山を含む静岡，清水の魅力のためであると考えられる。インバウンドにおける富士山は我々日本人が考える以上の魅力があるように思う。また，会場内に静岡の観光案内デスクを設けた。これは公益社団法人するが観光企画局に，静岡の観光名所に関する日本語，英語，中国語，韓国語のガイドと通訳スタッフを手配いただいた。デスクには多くの海外参加者が立ち寄り，観光名所や食事処について質問する様子がみられ，開催地に対する関心の高さがうかがわれた。

三つ目は多様な世代が参加したことである。当会議では，田中章実行委員長の発案で高校生の頃から環境アセスメント分野に興味を持ってもらうことを目的に，高校生が格安で見学できるようにした。当会議では，地元の静岡サレジオ高等学校から3名，長野県の東京都市大学塩尻高等学校から3名が参加するなど年齢層の幅広い会議とすることができた。高校生たちも環境分野の国際会議に参加するという体験を得ることができて大いに刺激を受けたようであった。

最後に，今回の会議は冒頭で述べたように多くの方々や組織に支えられて実現したものであることを終わった今でも実感している。後援を快諾して頂いた団体の皆様，会議開催を支援して頂いた団体の皆様，開催校の三宅祐一運営委員長をはじめとした静岡県立大学の皆様，当日運営をお手伝い頂いた EAI 株式会社の八木裕人様，Zoe Gozum 様，原本利浩様，日本工営株式会社の福田悠太様，東邦大学の柴田裕希様，伊藤夏生様，堀亜佑美様，兒島寧理様，東京都市大学田中章研究室の学生の皆には実行委員長共々心より感謝申し上げます。

大会情報の入手先

下記の AIC2018 in Shizuoka ウェブサイト URL には，大会プロシーディングス全編，写真集（会議，バンケット，テクニカルビジット）を掲載。

http://www.jsia.net/3_activity/koryu/English/schedule.html